

## 使徒の働き28章23-24節 「イエスについての説得」

### 1A 神の国の証し 23

#### 1B 神の支配

#### 2B キリストによる回復

##### 1C モーセの律法

##### 2C 預言者

### 2A 信じようとしぬ人々 24

#### 1B 聞いても聞かない鈍さ

#### 2B 種蒔きの喩えにある御国の姿

#### 3B 闇への愛

## 本文

使徒の働き 28 章を開いてください、ついに私たちの聖書通読の学びが最後の章になりました。午後礼拝で一節ずつ見ていきますが、今朝は 23-24 節に注目します。「<sup>23</sup> **そこで彼らは日を定めて、さらに大勢でパウロの宿にやって来た。パウロは、神の国のことを証しし、モーセの律法と預言者たちの書からイエスについて彼らを説得しようと、朝から晩まで説明を続けた。<sup>24</sup> ある人たちは彼が語ることを受け入れたが、ほかの人たちは信じようとしなかった。**」

パウロはついに、ローマに到着しました。イエス様がパウロがエルサレムにいた時に語られた言葉を思い出してください。「23:11 **勇気を出しなさい。あなたは、エルサレムでわたしのことを証したように、ローマでも証ししなければならない。**」そして今、彼はローマにいます。囚人としてはありますが、獄屋ではなく、監視の兵士がついているけれども、一人で生活することが許されました(16 節)。そこで彼は、ユダヤ人の主だった人々を集めました。そして、自分がユダヤ人たちを訴えるために、カエサルに上訴したのではないことを説明しました。ローマにいるユダヤ人たちは、パウロについて悪いことを知らされたことがないと話しています。けれども、この宗派については、いたるところで反対があるということを耳にしている、とのこと。あの暴動に発展するようなことにはなっていないことは、これ幸いです。そこで日を改めて、彼らはもっと多くの人々をパウロのところに集めたのです。

そこでパウロは、落ち着いたところで、しっかりと朝から晩まで説明を続けたのです。それが今、読んだ箇所です。彼のこれまでのユダヤ人に対する伝道の姿勢と変わることがないですね。そして、反応もこれまでと同じでした。受け入れる人々もいましたが、他の人々は信じようとしなかった、とのこと。

## 1A 神の国の証し 23

### 1B 神の支配

私たちキリスト者が伝えているものは、「福音」です。良き知らせです。パウロがコリント人への手紙第一 15 章で、こう書いています。「15:3-4 私があなたがたに最も大切なこととして伝えたのは、私も受けたことであって、次のことです。キリストは、聖書に書いてあるとおりに、私たちの罪のために死なれたこと、4 また、葬られたこと、また、聖書に書いてあるとおりに、三日目によみがえられたこと、」これが福音であります。けれども、バプテスマのヨハネ、またイエス様ご自身は、宣教を始められる時に、「マルコ 1:15 時が満ち、神の国が近づいた。悔い改めて福音を信じなさい。」と言われました。「神の国」を宣べ伝えておられたのです。そして、それが「御国の福音」と呼ばれます。「マタ 9:35 それからイエスは、すべての町や村を巡って、会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、あらゆる病気、あらゆるわずらいを癒やされた。」

ここでもパウロが、「パウロは、神の国のことを証し」したとあります。使徒の働きでも、何度となく、神の国を証している姿が出ています。まず、復活されたイエス様ご自身が語られました。「使 1:3 イエスは苦しみを受けた後、数多くの確かな証拠をもって、ご自分が生きていることを使徒たちに示された。四十日にわたって彼らに現れ、神の国のことを語られた。」そして、弟子たちは、「主よ、イスラエルのために国を再興してくださるのは、この時なのですか。」と尋ねますが、「いつとか、どんな時とかということは、あなたがたの知るところではありません。」と言われて、聖霊が臨まれることによる、世界への証しを約束されました。そして、弟子たちは神の国を証してきます。ピリポは、サマリアで「神の国とイエス・キリストについて宣べ伝えた。」とあります(8:12)。パウロは、ピリピの人たちには、「神の国に入るために、多くの苦しみを経なければならない。」と語りました(14:22)。神の国がもう近づいたと主は宣べ伝えられましたが、同時に、これから神の国の入るということも教えています。そして、パウロがコリントにいる時に、「神の国について論じて、人々を説得しようと努めた。」とあります(19:8)。

神の国とは何でしょうか？とても単純に考えればよいと思います、イザヤが預言しました。「40:10 見よ、神である主は力をもって来られ、その御腕で統べ治める。」神が統べ治めておられる状態、神の支配そのものと言ってよいでしょう。神が天地を造られ、ご自分に似せた人を造られ治められました。しかし、人が罪を犯したので、世は悪魔の支配に入りました。なので、世における悪魔の支配から神の支配に移すべく来られたのが、救世主なるキリストであり、キリストが十字架の上で死なれ、三日目によみがえり、天に昇られました。聖霊を与えて下さり、私たちは主が戻って来られるまでも、神の国の力、喜び、平安、それらの祝福を聖霊によって受け取ることができます。ですから、質問は「あなたは、神を王としていますか？そして救い主イエスを、主としていますか？」ということです。神を神としていること、王としてひれ伏して服していること。ここに神の国が広がり、また将来にもキリストが戻って来られることによって、全世界が神のものとなります。

## 2B キリストによる回復

ですから、神の国をパウロは証しました。そして次に、「**モーセの律法と預言者たちの書からイエスについて彼らを説得しよう**と」した、とあります。この世界を神の国へ回復せしめるキリストが、イエスであるということを旧約聖書から説得していったのです。イエスが、ユダヤ人たちの信じる聖書に明らかにされていることを、朝から晩まで説明していったのです。私も、いくつかの聖書学校で聖書を教えた経験が何度となくありますが、朝から晩までしたこともありましたが。ほんと、疲れました！けれども、心はどんどん燃え上がりました。なぜなら、旧約聖書にある数多くの証言が、イエス様を指し示していたからです。

世界にある大きな宗教の創始者で、前もってその出現が告げられていた人はいませんでした。ムハンマドがコーランの中で予め告げられてなかったし、仏陀もその現れの前に告げられていたことはありません。しかし、聖書は、間違いなくこのような人物であることを前もって、何百年、いや、千数百年かけて綿々と告げ知らせていったのです。だから、だれがメシア、キリストなのかを間違えることがないようにしていましたし、勝手に自分が救い主だと自称できないようにもされました。そして、その方が現れた時は、それこそ神からの方、はるか昔から前もって告げることのできる神がおられることが証明されるのです。個別の預言についていうならば、キリストについての預言がイエス様の生涯で実現したものは、三百を越えると言われています。だから、間違いなくイエスがキリストであるという証明ができるのです。

## 1C モーセの律法

先に話したアダムの罪ですが、その直後に女の子孫が、蛇の子孫のかしらを砕くという約束をしてくださいました。そして、ノアの箱舟によって、神の裁きにあってもキリストにあつて人々は救われる希望が示されました。アブラハムによって新しい国民イスラエルが造られることを神は約束されましたが、彼の子孫によって全世界が祝福されるとの約束があります。そして、アブラハムが愛する独り子イサクを、いけにえとして惜しまず献げるように命じられますが、それは父なる神が愛する独り子キリストを、罪のためのいけにえとして献げることを予め示していたものです。

そして、モーセの律法が与えられました。徹底的に、牛や羊などによるいけにえの制度が定められました。そこで流される血がありますが、これらは、後に来られる方がその肉体において、血を流されことによって、罪を清められるキリストが予め示されています。そしてモーセ自身が、自分がこの世から去る前に、こう預言しました。「申 18:18 わたしは彼らの同胞のうちから、彼らのためにあなたのような一人の預言者を起こして、彼の口にわたしのことばを授ける。彼はわたしが命じることすべてを彼らに告げる。」

## 2C 預言者

そして歴史書を見ても、ヨシヤの前に現れた主の將軍は、どう見てもイエスご自身のように見

えます。そして士師の時代を経て、ダビデの時、彼には世継ぎの子が与えられ、彼が永遠の御国を受け継ぐことになると神は約束されます。「Ⅱサム 7:12-13 あなたの日数が満ち、あなたが先祖とともに眠りにつくとき、わたしは、あなたの身から出る世継ぎの子をあなたの後に起こし、彼の王国を確立させる。13 彼はわたしの名のために一つの家を建て、わたしは彼の王国の王座をとこしえまでも堅く立てる。」

この約束に基づいて、数多くの預言が後に行われました。ダビデ自身が詩篇の中で、自分の後に来るキリストの預言を行い始めました。例えば、22 篇は有名です。「22:1-2 わが神わが神どうして私をお見捨てになったのですか。私を救わず遠く離れておられるのですか。私のうめきのことばにもかかわらず。2 わが神屋に私はあなたを呼びます。しかしあなたは答えてくださいません。夜にも私は黙っていられません。」詳細な十字架上における描写です。

そして、イスラエルの国が他国に倒される危機の時に、数多くの預言者が現れましたが、そして、その語る言葉たるや、後に、ことごとくイエスにおいて成就していくのです。「イザヤ 7:14 見よ。処女が身ごもっている。その名をインマヌエルと名づける。」処女降誕の預言です。ベツレヘムで生まれることを、ミカが預言しています。「ミカ 5:2 ベツレヘム・エフラテよ、あなたはユダの氏族の中で、あまりにも小さい。だが、あなたからわたしのためにイスラエルを治める者が出る。その出現は昔から、永遠の昔から定まっている。」イザヤは、ガリラヤからメシアが光となることを預言しました(9:1)。目の見えない人を見えるようにし、足なえが立てるよになることも預言しましたが、それも福音書でイエス様が行われているのを見ます。そして 53 章で、民の罪咎のため、身代わりに打ち傷を受けられることも預言しています。その他、エレミヤ書にも、エゼキエルにも、ホセアにも、ゼカリヤにも、至る所にメシアの生涯が預言されています。

そしてダニエル書には、「メシアが断たれる」とはっきりと預言しているところがあります。「9:26 その六十二週の後、油注がれた者は断たれ、彼には何も残らない。」そして、その断たれるという預言は、エルサレムの都を再建せよという命令が出てから、七週また六十二週の後だというのです。週は七年で、その命令は紀元前 445 年に出ましたが、数えると紀元後 30 年頃、そうです、イエス様エルサレムに入城されて、十字架に付けられた時です。それから、ダニエルの預言には、「次に来る君主の民が、都と聖所を破壊する。」とあります。それが起こったのは、ローマ軍がエルサレムを破壊した、紀元後 70 年です。ですから、この紀元 70 年の前にメシアは断たれていなければならない、そうすると、だれが、この救い主なのかものすごく限定されます。今、列挙した預言だけでも、ベツレヘムで生まれ、しかも処女降誕で生まれ、数々の奇跡を行い、そして十字架で死なれる。エルサレムが破壊される前です。これだけがすべて偶然にその通りになる確率は、天文学的になると思います。

そして、よみがえるという預言も、ありました。アブラハムがイサクを献げることを決めた時、三

日のうちに、実は心では神がイサクをよみがえさせるという信仰が与えられていました。詩篇には、敬虔な者を滅んだままにはしないという預言もあります。よみがえりこそ、メシアがアダムの罪を犯した以降に入ってきた死を滅ぼす存在として、神からの方、神の子であると預言されていたのです。「詩篇 2:7 あなたはわたしの子、わたしが今日、あなたを生んだ。」よみがえりによって、この方が世を救うキリストであり、神の御子であり、王として君臨されることが明らかにされました。

## 2A 信じようとしぬ人々 24

今、たった十数分でお話ししましたが、もっとも論証することができます。パウロは、朝から夜まで説明したと言っていますから、本当にものすごい数です。旧約聖書全体が、イエスについて証しているのです。ところで、たった今、この場で新約聖書を破ったとします。旧約聖書だけを持っているとします。そして、パウロがここにいたら、私たちは彼が新約聖書を手にして説明しているのではないかと錯覚するように説明していきましょう。それだけ、モーセの律法と預言書は、まさにイエスご自身を証しているのです。

### 1B 聞いても聞かない鈍さ

ところが、24 節をご覧ください。「<sup>24</sup> ある人々は彼が語ることを受け入れたが、ほかの人々は信じようとしなかった。」聞いているユダヤ人の人々は、聖書は神の言葉ではないと思っているような人々ではありません。それらを信じて、神がイスラエルを救ってくださると願い、祈っている人々です。けれども、これだけの御言葉からの証しがあったにもかかわらず、「ほかの人々は信じようとしなかった」とあります。同じことばを聞いていて、受け入れる人々と、信じようとしぬ人々がいます。信じようとしぬ人々は、理解できないから信じないのではありません。

パウロはイザヤ書 7 章にある言葉を引用していますね、26-27 節です。「<sup>26</sup> この民のところに行って告げよ。あなたがたは聞くには聞くが、決して悟ることはない。見るには見るが、決して知ることはない。<sup>27</sup> この民の心は鈍くなり、耳は遠くなり、目は閉じているからである。彼らはその目で見ること、耳で聞くことも、心で悟ることも、立ち返ることもないように。そして、わたしが癒やすこともないように。」聞いているし、見ているけれども、悟らず、知ろうともしない。そのために、立ち返ることもできないし、癒されることもないとのこと。よく分かっていないから受け入れないのでなく、受け入れたくないから、悟りたいと思わないから、つまり拒んでいるから分からないままにいる、ということでもあります。

### 2B 種蒔きの喩えにある御国の姿

神の国というのは、このように、神のことばを受け入れる人々によって成り立っています。神のことばを受け入れ、神のことばによって新たに生まれ、神の支配の中で生きようになります。けれども、問題は心で、そこに神のことばの種が蒔かれても、心が固ければ、あるいは雑草が生えていれば、実を結ぶことはないのです。イエス様は、四つの種類の土の喩えを語られました。当時は、



種蒔きは、手でばらまきます。良い土地に落ちるように蒔きますが、それでも、そこから外れる種も多くあります。道端に落ちたのは、鳥が来て食べてしまいます。岩地に落ちると、すぐに芽を出しますが、日に当たってすぐに枯れてしまいます。茨の落ちたのは、実を結ぶ前につぶしてしまいます。良い土地の落ちた種だけ、実を結ぶのです。

これが、イエス様が語られた、神の国の姿であり、人々がご自分のことばを受け入れるか、それとも頑なに受け入れない、あるいは、受け入れても表面だけなのかが試されるのです。道端に落ちたのは、堅い心です。全く影響をその人に与えません。岩地に落ちたのは、土が浅いように、表面的に、感情的に受け入れているのです。だから、その時は良かった！感動した！となるのですが、少し自分に都合の悪いことが起こると、すぐに、その信じたことを捨ててしまいます。そして茨は、世の思い煩いです。自分の生活が、信仰を持つことによって大幅に変わることはないか？自分が信じて、洗礼を受け、クリスチャンとして生きるなら、自分の今までやっていたことがいなくなってしまうのではないか？そういった思い煩いが出て来るので、せっかくイエスが確かに救い主だと信じようとしても、一歩、踏み出せません。良い土地に落ちるのは、心で決めて、しっかりと、神の言葉を受け入れることです。そうすれば、神が必ず実を結ばせます。自分ですることではなく、神が成長させてくださるのです。

### 3B 闇への愛

そして、イエス様は、ご自分のところに来ない人々について、「闇を愛している」ということを語られました。ヨハネ 3 章です、「ヨハ 3:17-20 神が御子を世に遣わされたのは、世をさばくためではなく、御子によって世が救われるためである。18 御子を信じる者はさばかれぬ。信じない者はすでにさばかれている。神のひとり子の名を信じなかつたからである。19 そのさばきとは、光が世に来ているのに、自分の行いが悪いために、人々が光よりも闇を愛したことである。20 悪を行う者はみな、光を憎み、その行いが明るみに出されることを恐れて、光の方に来ない。」光よりも闇を愛したから、ということです。イエス様の知識が与えられて、自分の闇、罪や悪の部分が照らされます。けれども、それをやはり、やりたい。だから、光のほうに来ないのだということです。

そして、そのこと自体が裁きであるとイエス様は言われます。救われる方が来られたのに、それを自ら拒んで闇の中に生きていくこと自体が、裁きだと言います。地獄というのは、意外に身近なものです。天国も身近です。それは、今、自分がイエス様を信じ、受け入れ、この方に従っている中で、死後も、あるいは携挙の時にこの方に会うだけです。イエス様を拒み、この方を要らないとし、避けているならば、その避けているままで永遠を過ごす、ということだけです。地獄は、幸せな生活を送っている人々が突如として、火の池の中に投げ込まれるというものではありません。今の自分が選んだ道をそのまま続けると言ったらよいでしょう。

二つの道が用意されています。どちらを選んでおられるでしょうか？